

Title	ディークシタルの居住空間からみるコンタクト・ゾーン
Author(s)	飯塚, 真弓
Citation	コンタクト・ゾーン = Contact zone (2011), 4: 116-137
Issue Date	2011-03-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/177236
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ディークシタルの居住空間からみるコンタクト・ゾーン

飯塚 真弓

1 はじめに

本稿は、南インド、チダンバラムのヒンドゥー寺院司祭集団ディークシタルの居住空間をコンタクト・ゾーンとみなし、そこで、浄・不浄の宗教的観念が居住空間内において、いかに認められているのかを明らかにする。

これまで、浄・不浄の概念は社会構造の仕組みと結びつけられて語られてきた。主な研究としては、カースト社会を規定するのはヒエラルキー的な浄・不浄の観念であるとするデュモン [2001] や、浄性を相対的なものとして、転移可能な流動的な不浄と不動な浄性、さらに神と人間を含む儀礼的けがれの構造について論じたハーパー [Harper 1964:194] の研究がある。そこでは特に上位カーストほど自身の浄性を保つべく浄・不浄の区別に厳格であることが指摘されている。ネワール族のバラモンを対象にした三瓶 [1991] は、けがれに配慮し行動することは、カースト社会の中で生きられるように社会化（教育）されることであると指摘し、家庭内で日常的に繰り返されることで、けがれを通して社会構造を内在化させていると述べている。

しかし、以上はいずれもイデオロギー的な図式、すなわち二元的な象徴体系をめぐる俯瞰的な地位や序列の議論である。マリOTTは土地、および儀礼時の水と食物の授受に注目してカーストと浄・不浄の関係を論じているが、日常的なやり取りについて記述してわけではなく、やはり儀礼からカーストとの関係をみる構造的視点に留まっている [Marriott 1955:189]。カースト社会を生きる実践に注目した研究では、オリッサの不可触民ムリを事例に、常に不浄とみなされる自らの社会的地位の低さを逆手に利用しながら生き抜くあり様について記述した田中の研究が挙げられる [田中 1997]。

ここで注目したいのは、浄・不浄の観念がカースト社会を規定するというイデオロギーが、実際の生活の中でいかに実践されているかである。ブルデュは、建築は私たち自身と私たちが作り上げた環境の間の相互作用を構築する傾向性の無意識の集合であり、建築をハビトゥスの具象化されたものとして捉えた。そして居住空間、特に家そのものがハビトゥスの図式の形成に重要な位置を占めるとし、家という構造をそこに住む人の動きや身体運動の関係からみようとした [ブルデュ 1990; 田辺 2002]。本稿では、このような居住空間に対するブルデュの視点を参考に、浄・不浄をめぐる実践が生み出される場所としての居住空間に注目する。浄・不浄をめぐる住居研究では、三瓶の先行研究をもとにプラジ

ヤパティらがネワール族の住まいについて、個人の浄性の変化と空間認識、浄化や食物授受から調査している [プラジャパティ・谷内・塩谷 2008a, 2008b]。彼らの研究は、儀礼のみならず住まいに暮らす人々の行動から住居の浄・不浄の空間認識について動態的事例を呈示している点においてこれまでの先行研究とは異なる。しかし、結局ハーバーと三瓶による三つの浄性レベル（浄・中間・不浄）の区分、およびウチとソトの二元論の表象としての空間概念の考察に留まっている。

そこで、本稿では居住空間における日常実践に注目して浄・不浄の観念について考察していく。その際有効であるのが居住空間を人と人との出会うコンタクト・ゾーンとみる視点である。コンタクト・ゾーンを権力の非対称的な関係の中で生じる複数のエイジェントたちの相互交渉の世界として、異なる文化が出会う社会空間であると捉えると [Pratt 1994; 田中 2007c]、ディークシタルの居住空間は、ディークシタルと非ディークシタルのコンタクト・ゾーンともいえる。本稿では、当該社会のカースト・ヒエラルキーの頂点に立つとされるヒンドゥー寺院司祭集団ディークシタルを事例に、彼らの居住空間における浄・不浄の観念の実践、またそれが近代化の影響によっていかに変化してきたかを考える。

実際の調査では、居住空間の間取りとその変化、空間の名前、意味と役割、そして家庭儀礼の際に居住空間がどのように利用されているかについて、参与観察とインタビューを行った。¹⁾

2 ディークシタルの世界

はじめに、本稿でとりあげるディークシタルの概要について以下、コミュニティの特徴、浄・不浄にまつわるライフスタイル、そしてディークシタルの住居がチダンバラムの町の中でどのような位置を占めているのかについて説明する。

2-1 概略

インド亜大陸の南端部に属するタミル・ナードゥ州は数多くのヒンドゥー寺院を有する地として知られている。特に10世紀から13世紀にかけて、時の王権によって数多くの巨大寺院が各地に建設され、同時に居住区、商業地区を有する寺町も形成された。チダンバラムもそのようにしてナタラージャ寺院を中心として形成された寺町のひとつである（図1）。ディークシタルはバラモンのサブ・カーストとして、古来よりナタラージャ寺院の宗教活動および運営は、彼らのみに許されているという特権を有する。本稿でとりあげるディークシタルを含め、一般にバラモンの寺院司祭は自身の高位カーストとしての特殊性を維持し、また常に寺院において神々に直接触れ、宗教儀礼を行うという仕事の性質上、排他的意識が強いといわれている²⁾。そのため、寺院で司祭を務める男性のみならず家族や近親者も含めて、宗教的な浄性の維持に対して敏感で伝統的慣習を重んじる。特に浄・不浄の区別は彼らの生活、慣習において厳格に順守されている。保守的な家庭では他カーストの人々に対して、家への招待、共食、台所への立ち入りも禁じていて、外来者と居住者

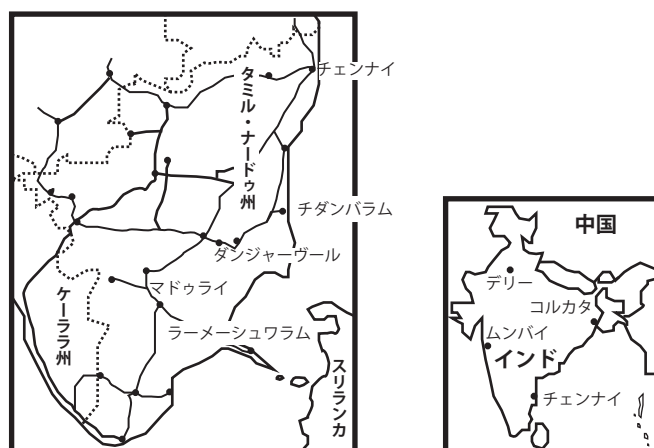
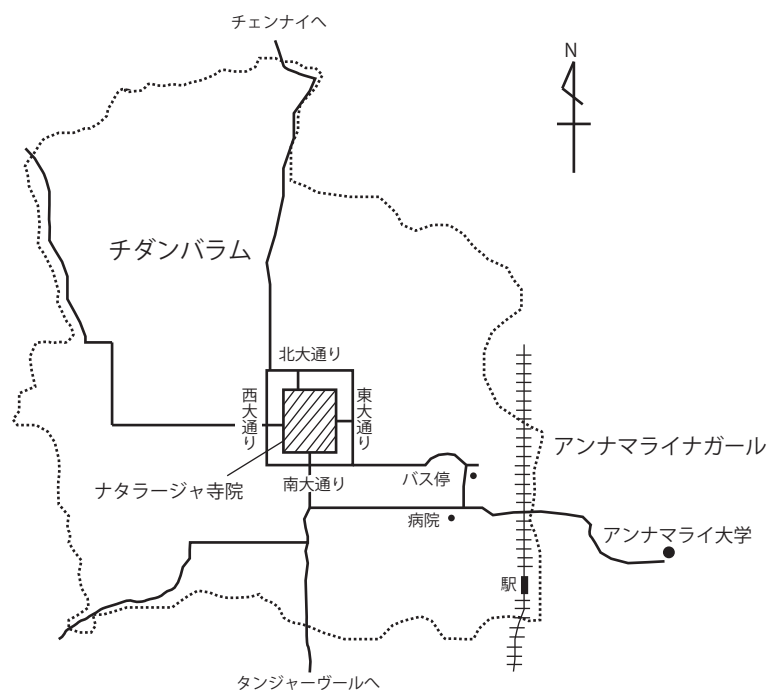


図1 チダンバラム

との境界が明確に区別される³⁾。

2-2 コミュニティの特徴

まず、コミュニティの構成は、ナタラージャ寺院の司祭の資格を持つディークシタルがおよそ200人、世帯数約100戸、全体でも600人程度の小さなものである。ナタラージャ寺院において司祭の仕事につくには同じくディークシタルの女性と結婚していることが条件となっているため、ほとんどの家族は互いに何らかの親戚関係を持っているといえる。

またパリーが指摘するように [Parry 1980], 一般に信者と接触する機会の多い寺院司祭は他者の持つ罪や不浄を吸収しやすい存在であると考えられているため、彼らはバラモンの中でも地位が低いとみなされているが、チダンバラムのディークシタルはバラモンの中でも地位が高いと自認し、周りのコミュニティからもそのように認められている [田中 1993]。その理由は主に以下の四点に集約される。第一にナタラージャとディークシタルにまつわる神話、第二に長い歴史の中で勝ち取ってきたナタラージャ寺院独自の寺院管理⁴⁾、第三にヴェーダに基づく礼拝 (Skt: pūjā) に対する高い誇り⁵⁾、第四に神に対する宗教儀礼のみを執り行うことにある⁶⁾。特に第四は他のバラモンと異なる点であり、ディークシタルが優位性をもちうる大きな理由である。

2-3 ライフスタイルにみられる浄・不浄

彼らのライフスタイルで特筆すべきは女性の管理 (muraippati) である [田中 1993: 130]。第一に貞節に関する管理と第二に不浄に関する管理の二点が挙げられる。サンガム⁷⁾に描かれた女性の儀礼的な力 (シャクティ Skt: śakti) の源は、カルプ (karpu) と呼ばれる女性の貞節にあり、妻の不貞の災いは夫に降り掛かるとする考えは古代から変わらず、現在でも特にタミルのバラモン社会で通用する概念である [Hart 1973: 237]。そこでは初潮を迎え、性的な魅力を持つ女性には男性を苦しめる聖なる力が宿ると考えられている。そのためディークシタルの女性は初潮を迎えると、親族の家の訪問や寺院への参詣以外の外出は望ましくないとされている。婚家に嫁いでも彼女たちの生活は四つの大通りの中で完結しており、夫に同行する以外ではチダンバラムの外に出ることはない。チダンバラムに伝わる「ティッライ (チダンバラム) に生まれた少女はその境界を決して越えることはない (tillaipen ellai tāntātu)」という諺は、ディークシタルの女性への管理の厳しさを端的に示している。今でも保守的な家庭では初潮が始まると学校をやめ、家の中で家事手伝いをする例がみられる。大学の学位を取得している女性もいるが、そのほとんどが通信教育であり、修士号を取得していても結婚後はたいてい専業主婦として家庭に入っている。実際、慣習に従い日々の宗教実践を行い、親族の通過儀礼、寺院の祭祀に参加することは彼女たちにとって何にも勝る優先事項であるため、彼女たちが外で働くことはほとんど不可能に近い。

不浄はティーットゥ (tiṭṭu) と呼ばれ、死亡、出産、月経の三つがそれにあたる。月経中の女性は3日間、寺院にて神像を拝む事、家の祭壇の神像に触れることはタブーとされている。ディークシタルの女性はこの期間実家に帰り、一切の家事を行わない。一般に土間などの隔離された部屋で3日間、ラジオを聞いたり、テレビをみたり、読書をしたりしてゆったりと一日を過ごす。儀礼的な不浄として忌避はされるが、普段家事や家族の世話に追われる女性たちが唯一何もせずに休息がとれる期間だといわれる。未婚の場合も同様、学校などは普段どおりに登校するが、自宅では家族と離れ別室で静かに過ごす。食事と同じ部屋で家族の中で一番最後に運ばれてきたものを食べる。

妻の月経中、夫は寺院での礼拝や神像に触れるような宗教儀礼を行うことができない。妻が妊娠中の場合にも夫は寺院での礼拝を行うことができない。さらに夫はその期間髪

毛、髭や爪を切らないのが決まりである。この遵守は妊娠6ヶ月までは任意、それ以降は出産が無事終わり10日目の命名式が済むまでは義務である。

ここで、彼らの夫婦の関係についてみる。一般的にヒンドゥー教では夫に対して妻が従属的な立場にあることが指摘されるが、チダンバラムでもその傾向が強い。⁸⁾司祭の語りの中でも「女性にとって最初の神は夫である」という言葉はよく聞かれる。しかし、だからといってディークシタルの女性たちが抑圧されているとは一概にはいえない。ひとつにはディークシタル夫妻の絆の強さが常に強調されることによる。ディークシタルにとって妻の存在は特別である。ディークシタルは幼少時に結婚式を行う。同居するのは成人してからだが、結婚後夫が儀礼を行うときには必ず妻が訪問し、参加しなければならない。儀礼の際、妻は聖なる草ダルバ (Skt: darbha kusa, *Imperata cylindrica*, 和名: チガヤ) で夫の肩に触れ、常に共にあることを示す。寺院での礼拝も結婚後、妻の存在によって夫にその資格が与えられるし、妻を亡くした夫は同時に礼拝の権利も失う。妻の月経中に礼拝を忌避する慣習を守っているのはナタラージャ寺院のみである。そしてもうひとつには、実家との密接な関係が理由として挙げられる。北インドでは婚家と実家が遠く離れていて、嫁が孤立しやすい傾向がよくみられるが、ディークシタルでは、いずれの家庭も婚家と実家は徒歩圏内に位置しており、頻繁に催される親族の通過儀礼に限らず、特に婚家で何も用事がなければ、ほとんど毎日実家に足を運ぶ。婚家の方針に従うことが基本だが、日々の出来事、夫や婚家への不満はすぐに両親に伝わり、両親が婚家と交渉する場合もみられる。コミュニティとしての規模も居住範囲も小さいので、情報は伝わりやすく、それが女性の行動を監視すると同時に、孤立化を防げ、ある種のセーフティネットとしても機能している。

夫婦をめぐる規範との関係で注目したいのは携帯電話の普及である。それは仕事を持つ司祭のみならず、ディークシタルの女性たちにも当てはまる。結婚式から初夜の儀礼の期間にかけて嫁が婚家に接する態度は、婚家では常に敬意を表すために許可をもらうまでは決して座ってはいけない、夫の名前を口に出してはいけない、アイコンタクトのみで直接話をしてはいけないと、これまでは厳しく管理されていた。しかし、後述するゴパール家では、婚出する前の嫁が毎晩夫と携帯電話で長話をしている姿を見かけ、彼らのようにまだ同居していない夫婦でも、二人だけの親密な会話を楽しみ、一般的に観察されるような恋人関係を築くことができるようになっている。

また、初夜の儀礼を終えた夫婦でも、人前で一緒に食事をとることは性的な関係を連想させるためにタブーのひとつとされているほどだが、一度大通りにて仲睦まじく手をつないで歩くディークシタルの夫婦をみかけて驚いたこともあった。

2-4 ディークシタルの居住区

現在のチダンバラムはモータリゼーションと近代化の影響を受け、かつての都市構造とは違った様相をみせている。20世紀前半まで、ディークシタルの居住区は南インドの伝統的な門前町の構造に基づき、北、東、南のサンナデイ⁹⁾と東大通り¹⁰⁾、南大通りに集中していたが、今では財政的な理由により町の中心部に位置する土地を売り、3、4階建てのビル

などに建て替えを行う例もみられ、自分たちは少し郊外に新しい家を建設することが多い。タミル・ナードゥ州ではこのようなビルをフラットと呼ぶが、新しいフラットにはディークシタルの家族のみならず、他のコミュニティの家族の入居もみられ、かつてのような階層構造はあまりみられない。それでも非公式に入居者がバラモンに限定され、肉食や飲酒の厳禁を入居の条件に課すところも多い。

東大通りはチダンバラムのバスターミナルの中継地点であり、観光客を乗せたバスや車はみなこの通りに停まるため、ホテルなどの宿泊施設もここからバス停へいたる通り沿いに集中している。南大通りには洋服店、家庭用品店、スーパーマーケット等がみられるが、チダンバラムの商業地域は寺院の西側、西大通りを中心とした地域である。チダンバラムの東は海岸であり、古来より西側に大都市チェンナイとティルチラーパッリ、タンジャーヴール、マドゥライを結ぶ幹線道路が発達し、南北の物資輸送が盛んに行われていたためである。サリーなどを売る衣料品店の他、金物屋や家庭用品店、果物屋等が並ぶ。

西サンナディから直線上に延びる通り沿いは金の装飾品を売る宝飾街であり、西大通りの裏は活気溢れる青物市場となっている。商人カーストであるチェッティヤールの人々が巡礼の際に宿泊所として用いる公共施設チェーティラム（cettiram）も南大通りの西端と西大通りに二つ存在する。寺町故に寺院の周りには肉類や卵を販売する店はなく、それらは大通りを離れた町の北西部に集中している。またこの地域と北大通り裏側からティッライ・カーリー・アンマン寺院の間に位置する地域はオート三輪などの運転手や労働者階級の人々が住む地域であり、一般的に治安が悪い地区だといわれている。

かつては乳業を生業としていたカースト（Konar, Skt: Yadav）の居住区が町の西に位置し、多くの牛が飼育されていた。今では高等教育の浸透により財力を増し、彼らはチダンバラムの中でも裕福層のひとつとなっている。

現在の都市構造においても、非公式ではあるが、特にバラモン・カーストを中心にカーストによる住み分けが少なからず存在する。しかし、現在ではカーストにかかわらず、高等教育、外国への出稼ぎ労働による経済力や財力の向上によって、都市構造は宗教的ヒエラルキーの住み分けを脱して、混住や解体が進み、再構成されつつあるといえる。

3 ディークシタルの居住空間

ディークシタルの家屋は、寺院のすぐ近くに立地し、日本の町家のように間口が狭く奥行き長い平面を持つ。これまでディークシタルのライフスタイルや、彼らを取り巻く環境について述べてきたが、その中でも特に浄・不浄に関する厳しい習慣は彼らの居住空間の間取りや動線にも色濃く反映されており、他のコミュニティとは異なる建築的特徴として表れている。以下、まずタミル・ナードゥ州における長屋型伝統住居の基本形を明らかにし、次にディークシタルの住居について、伝統住居、新旧家屋の比較に言及しその変化と彼らの住居の特徴を示す。

3-1 長屋型伝統住居の基本形

タミル・ナードゥ州の寺町、および都市部にみられる長屋型の伝統住居には、共通してみられる基本形がある。それは中庭の周りを組積造りの平屋建ての建物で囲む住居の形である（図2）。日本の家屋と比べると束と母屋の間に五平材を挿入した小屋組が特徴的である。この材に長い板を渡し、マッチュ（maccu）と呼ばれる天井裏の収納スペースとしても利用される。なお、平面については以下のような特徴を持つ（図3）。

第一に、街路に面して地面から一段上にベランダであるティンナイ（tiṇṇai）を持つ。ティンナイは住居の前面に設けられ、街路との境界には格子がはめられている。木もしくは石の列柱が屋根を支え、柱に彫刻や装飾が施されている場合もある。外から見える構造になっており、家の外部と内部の緩衝空間として捉えられ、簡単な応接の場としても機能する。風通しがよいので、座って人の往来を眺め、歓談する休息空間でもある。

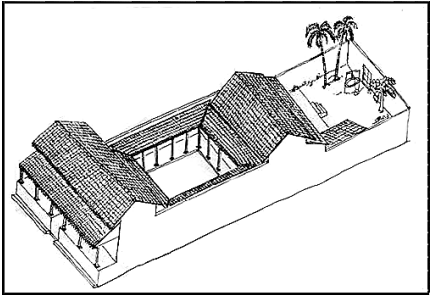


図2 長屋型伝統住居鳥瞰図 [Dulau 1993: 81]

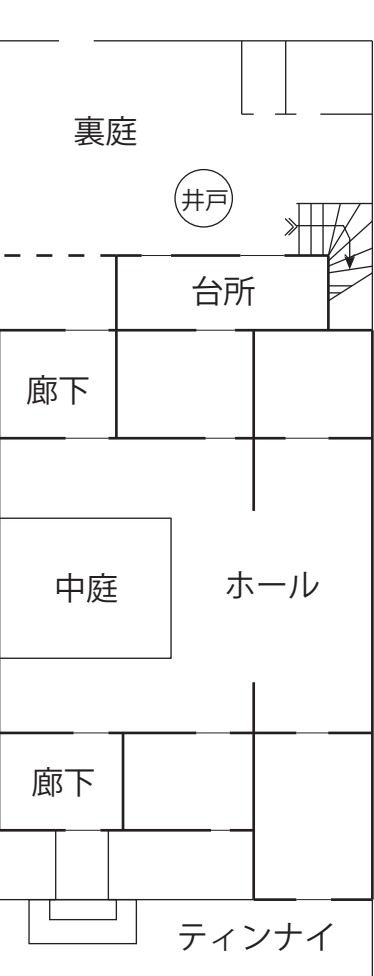


図3 タミル・ナードゥ州伝統住居平面図 ([Dulau 1993: 79] より作成)

第二に、住居の中央部分に中庭（murram）を持つことである。基本的に伝統住居には窓がない。熱帯性の気候に対応するために、外の強い日差しと熱気になるべく家の中に入らないように造られているからである。また、中庭は新鮮な空気を得たり、明るい日の光、夜には月明かりを得る役目や夕方の涼しい空気を家の中に取り込む役目を果たしている。中庭の上の格子にはブランコ（uṇcal）を下げるための金具が残っている。かつては結婚儀礼などの際に新郎新婦が座る場所として、普段は夕涼みの場として用いられていた。また、家の内部において唯一外部へと垂直方向に開かれた場所として、神へ祈る場、つながる場としても機能する¹¹⁾。中庭のまわりには開放的なホール（kūṭam）が設けられ、家族が集う場として、居間や食堂、そして夜には寝室と多目的に用いられる。

第三は、裏庭（tōṭṭam）と呼ばれる裏庭を持つことである。裏庭は住居の一番奥に設けられる屋外の空間である。石やコンクリートで舗装された部分にはトイレや浴室、井戸などが配置され、さらにその奥には果樹やココヤシ、ヘンナ¹²⁾の樹木等が植えられている。

第四は、玄関から裏庭にいたるまで主要な部屋のドアが直線状に並んでいることである。廊下（naṭai）が玄関から裏庭まで直線的な動線を形成し、住居内の

主動線となっている。これもまた構造的には熱帯性の気候に対応するための換気、通気を確保するためであると考えられる。

ここで居住空間内の方位と行為の関係について述べておきたい。ヒンドゥーのコスモロジーでは、居住空間内で行われる行為が特定の方位と結びつけられたイメージで語られることがある。東から順にみていくと、東は光、暖かさ、人生における喜びや繁栄、それに対して西は暗さ、冷たさ、死や衰えのイメージである。北の月、平和、穏やかさ、快さに対して、南は死を司るヤマ（閻魔）や死そのもののイメージで語られる。例えば、葉は病気が早く「衰える」ように西を向いて飲む。金の装飾品を身につける時には、「財の繁栄」を願って東を向いてつける。タミル・ナードゥ州マドゥライ近郊の農業村を調査した関根[1992]によると南西の方角は未婚のまま死んだ処女神カンニが司る方角で、性的潜在力を秘めた方角であるという。初潮儀礼、出産や死亡の際に不浄を背負う人が隔離される場所は南西の隅に設置され、そこは居住空間内にありながらも他界と接する場所となる。

3-2 ディークシタルの伝統住居

前述したように、町の中心に位置する伝統的なディークシタルの住居は近代化と財政的理由により年々減少傾向にあり、今では数十件を数えるのみである。ディークシタルの住居のファサードは、ティンナイの街路側の地面から1mほどの高さまでの腰壁に赤と白のストライプ模様が描かれているために一見して区別することができる（写真1）。この模様は一般にシヴァ派の寺院の外壁に描かれている模様と同じであり、白はシヴァ神（Śiva）、赤はその配偶神のシャクティ女神（śakti）を表している。これは伝統家屋のみならず、建て替えられた比較的新しい住居にもみられるものである。ディークシタルの伝統住居は、前述した長屋型伝統家屋の基本形と比較して以下のような特徴がみられる（図4）。

第一に、家の主動線が2本あり、公私の区別が明確なことである。主な動線は玄関から裏庭にいたる直線であり、これが公の動線にあたる。そしてもうひとつの動線は私的な動線であり、それは外に開けてはいないが、直線上に並んでいる点は共通している。主動線が2本あるのは、かつてカーストの区分がより明確であった時代に、バラモン以外の人々が家屋に立ち入り、彼らと空間を共有することが不浄な行為とみなされていたからである。政府の役人等が家に立ち入る際など、親族以外の客人に対して使われた動線が公の動線である。さらに、家屋内に二つ存在する中庭のうち、玄関側を公的な中庭、裏口側を私的な中庭と捉えることもできる。そこでは使われている木材も異なり、公の空間ではビルマ産もしくは国内産のローズウッドやチーク（写真2）、私的な空間は地元産で質の下がる木材を用いていた（写真3）。ヒンドゥー教の家庭では夕方になると玄関両脇に小さなオイルランプを灯す習慣がみられる。そのため



写真1 ディークシタルの家のファサード

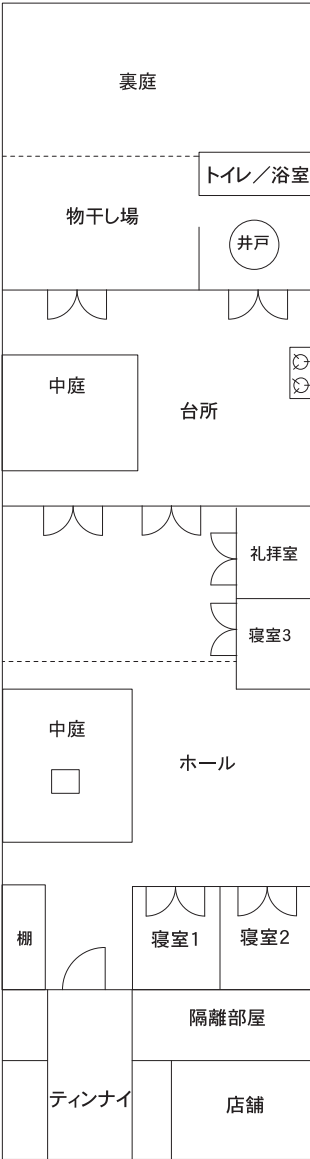


図4 ディークシタル伝統住居平面図



写真2 ホールの柱

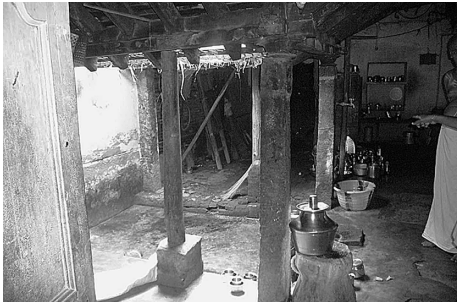


写真3 私的な中庭



写真4 バナナの装飾

ティンナイの玄関扉の両脇の壁にはランプを置くためのニッチ（壁龕）が設けられている。このランプの明かりを目印に財産と金運を司るラクシュミー女神が家にやってくると信じられており、主動線が直線的である理由は通風という物理的な理由の他、彼女が家を訪れた際に玄関から裏庭まで一直線に通り抜けられる家が好ましいとされる宗教上の理由もある。

第二は、月経中の女性を隔離するための部屋や空間が設けられていることである。女性の不浄は接触性を強く含意し、接触を忌避すべき存在であると捉えられているため、空間的に隔離される。この空間はタミル語で不浄な部屋を意味するティーットゥ・アライ（*tiṭṭu arai*）と呼ばれる。部屋の位置は、ティンナイ奥の壁を隔てた半オープンスペース、裏庭の別棟、私的な動線上等に設けられる例や、2階の一部が隔離スペースとなっている例のどれかであった。空間的制約のあるフラットでは、部屋の隅にカーテンを掛けて仕切り、隔離空間をつくっている例もみられた。

第三は、シルパ・シャーストラ（*Skt:silpa sāstra*）¹³⁾に基づく装飾がみられることである。撓わに実るバナナの装飾は多産と豊穡の象徴として寺院の装飾に好んで用いられるものであり、ナタラージャ寺院内部の大きな石造の列柱

上部にもよくみられる。寺院同様、家屋内部の公の空間にもバナナのモチーフが観察される（写真4）。ディークシタルの家では結婚、出産に関わる家庭儀礼の際には必ず実を付けたバナナの幹が玄関の両脇に飾り付けされる（写真5）。また伝統を重んじる家では食事は必ずバナナの葉の上で頂く。同じく吉祥のモチーフである蓮の花の装飾もよくみられる。

第四に中庭の中央にトゥルシー（和名：カミメボウキ、*Ocimum Sanctum*）を植えた備え付けの鉢が置かれていることである（写真6）。ヒンドゥー教において、トゥルシーは聖なる植物として、大地の女神（ブーデーヴィー）、米の女神（ラクシュミー）、川の女神（ガンガーデーヴィー）等と並んで自然を神聖化した女神のひとり、トゥルシー・デーヴィーとも呼ばれる。またラクシュミーと同じ女神とも考えられており、ラクシュミー女神を祀る家では家庭における礼拝の際にもトゥルシーに対して同様に礼拝を行うことがある¹⁴⁾。そのため月経中の女性は接近も忌避される。アーユールヴェーダではトゥルシーは喉の痛みや咳などの風邪の症状に効果があるといわれているため、常に外気と触れ、時には冷え込み風邪の引きやすくなる中庭付近にトゥルシーを植えるようになったともいわれている。

第五は、ティンナイをカッタライダールの人が泊まるスペースとして利用していた点である。カッタライダール（kattalaitār）とは、それぞれ特定のディークシタルを通じて、ある寺院儀礼のパトロンとなったり、また年期契約により一定額を支払うことで私的な儀礼活動を執行してもらう信者をさす。かつてはロッジやホテルなどの宿泊施設などはほとんどなく、チェッティラムなどの巡礼客向けの宿泊施設は財力のある人々しか利用できなかった。そのため経済的に余裕のない人々が遠くから巡礼に訪れた際、ティンナイのスペースが夜の寝床として提供されていた。その名残として玄関脇のティンナイの壁には枕として利用されていた段差が残されている家もある。

ディークシタルの浄・不浄に関する明確な区別は、部屋の使用、住居の動線にも関係している。寺院建築と同様の装飾が用いられている点は、彼らの司祭としての地位に関係し、ティンナイがカッタライダールのための空間として利用されている点も司祭の家にしかみられない特徴である。

また、方位と行為の関係を考えてみると、関根の調査地が一戸建て住宅を中心とする村地域であったのに対し、ディークシタルの住居は寺院を取り囲むように建てられ、隣接する家屋同士が壁を共有するような住宅である。そのため、後述するゴパール家では月経の際の隔離空間は家屋の南西端、ティンナイの奥に設置されていて、必ずしも理想とされる方角と部屋の間取りが一致するわけではない。さらに方角と間取りについて、奥行きの方



写真5 儀礼時のバナナの木の飾り付け



写真6 公的な中庭のトゥルシー

常に深い長屋型の住宅では、ヴァーストゥ・マンダラ¹⁵⁾に当てはめて間取りを決めることは難しい。ただし、台所 (camaiyal arai 料理部屋, attuppu arai かまどの部屋) はなるべく東南に作られ、かまどの向きはどの家も共通して東を向いている。それは東南が火を司るアグニ神の方角であること、かまどの火が生み出す豊穡さを東からの太陽の光が保証するからだといわれている。

3-3 ゴパール家の居住空間

以下、家屋内部において実際にディークシタルがどのように暮らしているかをゴパール家を例にとって、家族関係、家の機能、境界、方位、新旧の家の比較について記述したい。ゴパール家は北大通りに面する一軒家である。長男ゴパール夫婦と子供3人の世帯、三男ムルガンの夫婦、未婚の次男ナタラージャンと四男クマール、ゴパールの母方の寡婦の女性の、10人から構成される拡大家族である。ゴパール家はナタラージャ寺院の司祭の他、町の東北に位置し、チダンバラムの土着神であったといわれているティッライ・カーリー・アンマン寺院の専属司祭の権限も有するパンガーリ (paṅkāli)¹⁶⁾ である。現在の家屋はゴパールの祖父の時代にセーラム¹⁷⁾在住でカーリー女神を家族神として持つカウन्दール・カーストの信者によって寄贈された。ゴパールの祖父はカーリー女神と話をすることができ、彼が歩くとカーリーがゴルス¹⁸⁾の鈴を鳴らして後ろをついてきたといわれている。また一年のうち半年は寺院でプージャーを行い、残りの半年は酒と女の放蕩生活を送っていたというエピソードも、宗教的規律を厳格に守るディークシタルの中では破天荒だが、特別な力を持ち合わせた伝説の人物であったことをよく伝えている。

3-3-1 家族関係

まずゴパール家の家族構成員について説明する (図5参照)。家長であるゴパール (GO) だが、両親は亡くなっており、四男三女兄弟姉妹の長男である。常にティッライ・カーリー・アンマン寺院でクムクムと呼ばれる赤い聖粉を用いたカーリー・プージャーを行うために手足が赤く染まっている。パールヴァティ (pa) はゴパールの妻で36歳である。料理上手で情が深く、筆者は彼女にタミル料理を教わっていた。ゴパールとパールヴァティの夫婦にはアンナマライ大学で電気工学を学ぶ長男チャンドラン (CA)、もの静かで勉強熱心な12学年¹⁹⁾の長女ガイトリ (ga) と明るく正義感が強いが少しお調子者の10学年の次女アンビガ (an) の3人の子供がいる。チャンドランとガイトリは既婚だが、ディークシタルでは結婚式を済ませていても初夜の儀礼 (Skt:santi mugurtam) を迎えるまでは夫婦は別々に暮らすため、二人とも実家であるゴパール家で生活している。ナタラージャン (NA) はゴパールの弟で、生まれつき手が不自由なために結婚せず、寺院の仕事もできないのでほとんどの時間を家の中で過ごしている。ムルガン (MU) はゴパールの二番目の弟で2007年に初夜の儀礼を済ませているが、子供はまだいない。アイシュワリア (as) はムルガンの妻でゴパール家の中では一番よく動き働くが、台所に入っても補助的な炊事給仕のみを行う。クマール (KU) はゴパールが一番下の弟で25歳である。夜の就寝時と食事時以外はほとんど家にいない。2009年10月末に初夜の儀礼を行い、ミーナ

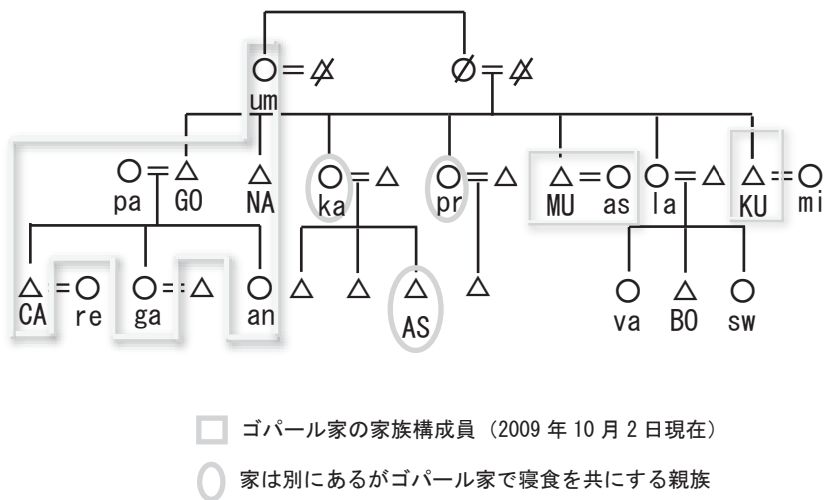


図5 ゴパール家親族関係

クシ (mi) を妻に迎える予定であった。ウマパティ (um) はゴパールの母方の叔母にあたる寡婦である。2008年にゴパールの母が亡くなった後、ゴパール家で暮らすようになった。毎日5時半にナタラージャ寺院のパール・ナイヴェーディヤ (pāl nivētanam) の儀礼 (神の目覚めの儀式であり、牛乳 pāl を供物 n ivētanam として供える) をみに出かけるのが日課であるが、それ以外の時間はほとんど家の中にいる。この他、家は別にあるがゴパール家で寝食を共にする親族がいる。カーマクシ (ka) とプリヤ (pr) はゴパールの実の妹たちであり、共に婚出しているが、二人の間には主に食事当番のルールがあり、どちらかひとりが必ずゴパール家にいる。アスウィン (AS) はカーマクシの長男でほとんど家に帰らずゴパール家で寝泊まりする。カーマクシやプリヤがゴパール家に滞在中、夫や他の息子たちはどうしているかというと、夫たちは食事はゴパール家でとり、寝るときは自分の家に帰る。他の息子たちはパーダサーラ (pāda śālā) と呼ばれるヴェーダを学ぶ寄宿制の学校にいたので普段は留守である。

次に台所空間からみえる家族関係を説明する。血縁の他、空間的には住居とかまどを共有するのが家族であると考えられるが、ゴパール家の台所では調理スペースが2カ所に分けられる。ここではかまどの火のみならず、調理器具、スパイスなども二分されている。それぞれのかまどの火とそれを主に用いる女性、そのかまどで作られた料理を食べる人で以上のメンバーを分けると図6のようになる。パールヴァティとカーマクシは折り合いがあまりよくないのだが、カーマクシはパールヴァティの料理の腕を信用しており、いつも料理の味見はパールヴァティにしてもらっている。カーマクシやプリヤはポリエルやクートゥ、コロンプなどのカレーや副菜をパールヴァティの家族にお裾分けするが、パールヴァティの方からお裾分けをすることはほとんどない。パールヴァティが月経の不浄で料理ができない場合も、パールヴァティのかまどのメンバーが

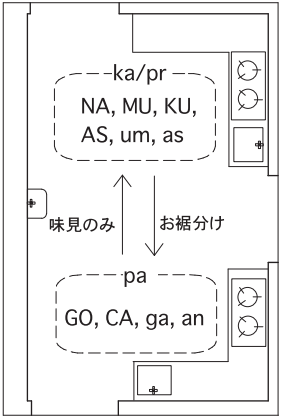


図6 ゴパール家台所



写真7 儀礼時の共同調理

のだが（写真7）、台所からは長男の嫁と義理の妹たちの複雑な関係が観察される。

3-3-2 家の機能

まず、通りに面した玄関から順に個々の部屋とその機能についてみていく（図7参照）。

玄関（vācal paṭi）は朝と夕方の一泊二回、水を打って掃き清められ、コーラム（kōlam, 米粉で描く吉祥模様）が描かれる（写真8）。玄関を入るとすぐのティンナイ（ベランダ）は、外からもみえる構造になっており、家の内と外の緩衝空間である。西の奥は月経中の女性のための隔離空間にもなっている。毎日決まってやってくる野菜売りやタイル（tayir, ヨーグルト）売り（9時半頃）と花売り（夕方）はここで商売をする（写真9）。

ティンナイの東にはサントウ（cantu）と呼ばれるティンナイから裏庭に通じる一直線の細い通路がある。この道には屋根はなく、月経中の女性以外、家族がこの通路を用いることはない。皿洗いの使用人は家の中ではなく、このサントウを通して裏庭の流しで仕事をする。この家の場合、裏庭のトイレに行くには台所を通らなくてはならない。しかし、台所が家庭儀礼の朝食の準備で込み合っていたので、子どもたちはサントウを通してトイレに行こうとした。これを台所からみていたプリヤは彼らを激しく叱った。この日、ゴパール家には誰も月経中の女性はいなかったため、実際には不浄な人と動線を共有することはなかった。それでも、前述した伝統住居同様、明確に浄・不浄の動線を区別する姿勢はこの家でも観察された。

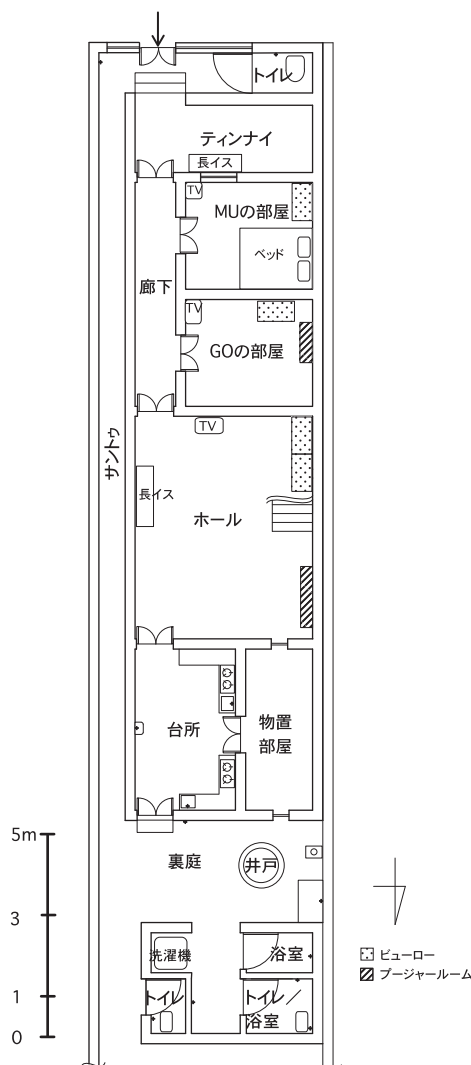


図7 ゴパール家平面図

廊下では、花売りの女性が入ってくることもある。ガートリの通学用自転車もここに置かれている。

廊下から西には寝室が二つ並んでおり、トゥーング・アライ (tūṅkum arai 眠る部屋)、もしくは単にアライやルームと呼ぶ部屋がある。ティンナイ側の部屋はムルガンとアイシュワリア夫婦のための部屋である。テレビとビューロー²⁰⁾、ベッドが置かれている。同じ間取りのゴパールの部屋とは異なり、ムルガンとアイシュワリアがここで食事をとることはない。夜ムルガン夫婦の寝室として使われる以外は子供たちがテレビをみる部屋として使ったり、カーマクシとプリヤが着替えをしたりするために用いるときもある。月経中で隔離された女性がティンナイの長椅子に座り、ムルガンの部屋とティンナイの間の窓からテレビをみたりもする。

ゴパールの部屋では、パールヴァティの「かまどのメンバー」がここで寝食を共にする。およそ2.6 m × 3.2 m のスペースに5人分の家財や衣類等がところ狭しと置いてあり、床には4人がぎりぎり眠れるスペースが確保できる程度

である。チャンドランは幼少の頃からの習慣で徒歩10分の母方の祖父母の家で寝起きをし、ゴパールも寺院の中で就寝することも多い。西奥には小さな神棚が置かれており、日々の礼拝もここで行う。ゴパールを除いて他のメンバーはホールでくつろぎ、隣のムルガンの部屋に出入りすることはほとんどない。

ホールでは、カーマクシ／プリヤの「かまどのメンバー」が食事をとる。ちなみにゴパール家のホールには中庭はない。ホールの北西には神への礼拝用具が設えてあり、両親の写真が飾ってある。ビューローも二つ置かれている。パールヴァティの親族を除いて、親族の来客はここのホールに通され、長イスに座るか、プラスチック製のひとりがけのイスに座るように勧められる。家庭儀礼の際にはここでホーム (Skt:homa, 護摩) が焚かれる (写真10)。夜はみな枕もゴザ (pāi) も用いず、そのまま床に寝る。ムルガンが午前中に二度寝をすることもある。

家の一番奥に位置するのが台所である。ヒンドゥー教にはその人の性質は何を体内に取り込んだかによって決定されるという考え方がある。殺生に関わる肉を食べる人は肉食主義者よりも不浄であるとみなされる [Fuller 2004]。また飲食物には熱／冷の区別があり、人の健康は消費した食物の熱／冷のバランスに左右されるも



写真8 玄関のコラム



写真9 ティンナイの野菜売り



写真10 ホールでの護摩

のだと捉えられている [Beck 1969]。神に直接触れることを生業にしているディークシタルは常に浄性を保たなくてはならず、それ故に彼らの食事が作られる台所は外部者の立ち入りを含め、他の空間よりも厳しく管理される。また神への供物が調理される場所としても重要である。東に洗面台が設置されているが、もっぱら食前食後に手を洗い、口を濯ぐためにしか用いられない。

玄関横の物置部屋は単にストアールーム²¹⁾と呼ばれる。ここは常にドアが開いた状態にある。家財といっても大きな家具や貴重品が置かれているわけではなく、稀にしか使わない大きな鍋や調理道具などが雑に置かれているだけである。ホールで寝るカーマクシ、プリヤ、ウマパティは水浴の後、たいていここで着替えをする。スマンガリー・プージャー²²⁾などクーダムで行われる儀礼の際に、親族の女性の着替えもここで行う。

この家に暮らすすべてのメンバーが共通に使用するのが、裏庭のトイレと浴室の空間である。台所裏の水道を用いて洗顔、歯磨きをする他、アスウィンや小さな子供はここで水浴もする。井戸の西には備え付けの石臼（ammi）が置かれている。皿洗いの使用人は西北にある水道で仕事をする。台所を出てすぐ東に食べ残しなどを捨てる生ゴミ用バケツが置かれている。トイレと浴室は独立した建物になっており、トイレが二つ（一つは浴室兼用）、浴室、洗濯機を置くスペースを持つ。洗濯機を使用するのはカーマクシやプリヤのメンバーのみである。パールヴァティのメンバーの場合、ガーイトリとアンビガは水浴をする時に自分で洗い、夫ゴパールと息子チャンドランの衣類はパールヴァティが洗濯する。

3-3-3 境界

居住空間内の境界に目を向けてみる。まず、人々の居場所の割合について考える。図8をみると女性であるパールヴァティ、ガーイトリ、アンビガと男性であるゴパールとチャンドランでは明らかに居場所の割合が異なることがわかる。女性たちは自分たちの私的な空間であるゴパールの部屋に居ることが多く、男性は外出の割合が高い。外出の目的も、女性の場合は油や牛乳などの日常のこまごまとしたお使いが主で、寺院に出かける以外はどれも30分以内で用事を済ませて帰ってくる。それに対して男性はほとんどの時間を主に寺院で過ごし、女性の生活世界と男性の公共世界の対比が観察される。

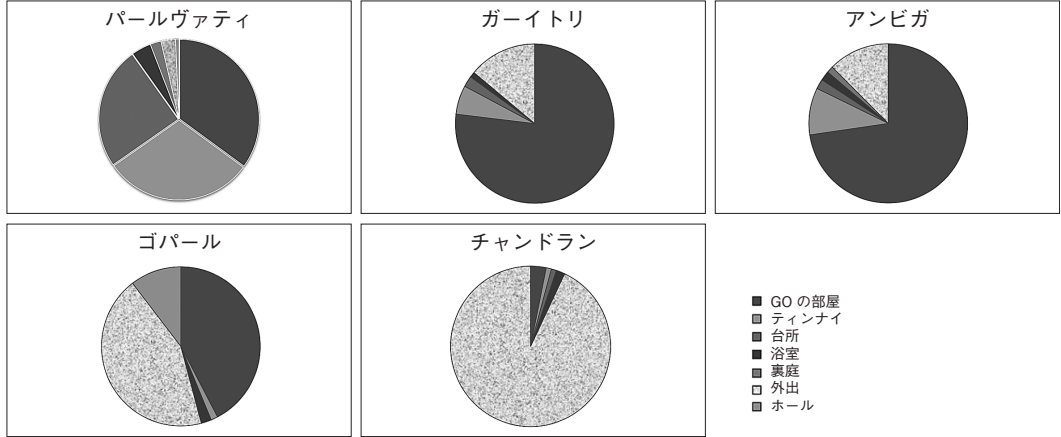


図8 ゴパール家メンバーの居場所の割合

次に、どれくらい親しい人がどこまで入ることができるのか、という人間が織りなす関係分布の濃淡の節目を空間の物質的外縁と一致する境界として捉えた上で、まず外来者と居住者の関係についてみる（図9）。終日の調査を行った2009年10月2日の外来者の観察の結果、および、この日の朝、月経の不浄が終わったパールヴァティと月経開始のためゴパール家に帰省したラクシュミー（la）の一日の行動から浄と不浄の空間の境界を考える。この日の外来者は全部で18人、そのうち親族が12人、親族以外は6人、水売りの男性を例外とすると、親族以外の外来者は、基本的にティンナイより内側の空間（二点鎖線で囲った部分）には入ってこない。皿洗いの女性は、廊下やホールを横切ることではなく、必ずサントゥと呼ばれる東側に設けられた細い小道を通して裏庭に行く。それに対して親族の来客者は、男性ならばホールでくつろぎ、女性ならば躊躇なく台所までやってくる。ちなみに、ゴパール家のメンバーや親族たちは外から戻るとサンダルを玄関に入ってすぐ左のスペースに置くが、親族以外の外来者は玄関の外でサンダルを脱いでから玄関をくぐる。実線で囲った空間は、着替えや性交など最もプライバシーを守らなければならない活動が行われる。台所はデーヴァサーナ（dēvacanam, 先祖の命日）などの特別浄性に気をつけなければいけない時には家族以外の者が立ち入ることが禁止される空間となる。浄と不浄に関してはティンナイと廊下を隔てるドアの外からアンビガを呼び、鍵を開けさせ、サントゥを通して水浴に行ったパールヴァティの朝の行動、裏庭から裏口の扉を挟んで台所のパールヴァティたちとおしゃべりをしていたラクシュミーの行動から、二点鎖線で囲った空間は月経の不浄の影響を及ぼしてはいけない空間であるといえる。

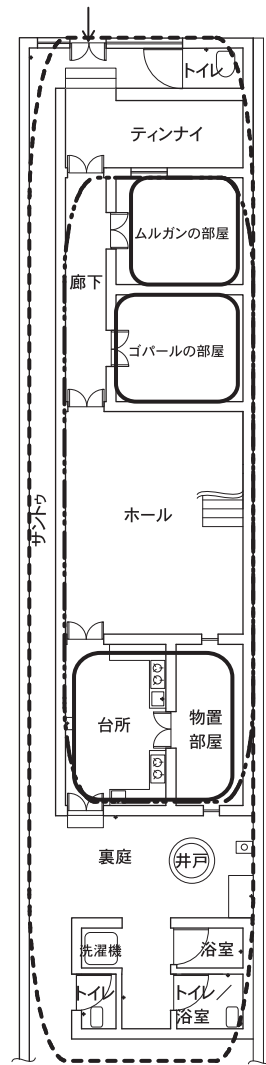


図9 ゴパール家境界

はっきり区別される境界にはその内部と外部を分け隔てるシンボルが存在する。ブルデュの言葉をかりるならば、そこには「敷居の呪術的境界機能」[ブルデュ 1990: 229]が存在する。通りに面した一番外側の玄関にはコーラムが描かれる（破線の境界）。二番目の境界ではティンナイの側のドアの両脇の壁にはランプを灯すためのニッチが存在する（二点鎖線の境界）。そして、いずれの境界も町の境界に女神寺院が配置されているのと同様に女神のシンボリズムに結びつけられて語られる。

ここで境界マーカースとしてのコーラムの機能と意味について触れておきたい。一般にコーラムには三つの役割があると理解されている。第一に米粉によって描かれるコーラムは同じく米に宿るとされているラクシュミー女神を招待する役割を持つ。寺院や儀礼時に

は、女神のみならず、神像のもとへいたる道筋や神々の通り道を示すこともある。タ方ラクシュミー女神を招待するために表の玄関脇にランプを灯す際には、直線上に位置する裏口のドアは閉める。裏口を開けておくと、ラクシュミー女神の代わりにムーデーヴィー (Mudevi) と呼ばれる不運を司る女神が家に入ってきてしまうからだと説明される。第二は蟻などの小さな生物への施し、さらにはサドゥーなどの現世放棄者や巡礼者などが施しを求めることのできる家であるという識別マーカーにもなる。第三は外部からの妬みや嫉みの心を捉える邪視よけの役割である。コーラムとして描かれる幾何学模様について、ジェルは守護的で吉祥なコブラとの関係、および外から家に入り込もうとする悪霊を迷路のわなにかけ追い払う役目があることを指摘している [Gell 1998:84]。日常生活の中でコーラムの描かれる時間は、夜明け前と日の入り前の時間的な境界である。特に早朝4時から6時半はブラフマー・ムールティ (brahmā-mūrti) と呼ばれ、神々が人間に顔を向ける時間であると考えられている。これより、コーラムは居住空間において、内と外を隔て、境界を守り、神と人間の出会う場を示している。

以上簡単にまとめると、ディークシタルの居住空間には、浄・不浄、および女性の管理に関する厳しい宗教的慣習が、間取りや動線、居場所の割合や境界設定にも色濃く反映されている。

4 家屋の新旧比較

4-1 二極化

近代化を生活の合理化と西欧化の傾向とするならば、その中でディークシタルはインドの伝統価値を忠実に保持するヒンドゥー教徒のモデルとして儀礼の遂行を重要視されながらも、財政的には厳しい状況にあり、彼らの住居は二極化の傾向にある。一方は、主に寺院の仕事の他に兼業する仕事を持つ比較的裕福な住居と、もう一方は、寺院での司祭の仕事のみに従事する家族の住居である。前者は、大学や銀行等で専門職を持つ人であり、チダンバラムの3 km ほど南東に位置するアンナマライ大学で教授や講師を務めたり、大学の事務の仕事についたりする人も多い。また、聖紐式以後、パーダサーラに学び、特別にヴェーダを習得した人も、先生として司祭の子供たちの教育に従事したり、インド各地から大きな宗教儀礼に儀礼執行者と呼ばれたりするようになり、比較的安定した収入を得ることができている。彼らの家は大きな一戸建てで、二世帯で同居していることもあれば、成人した息子夫婦が独立してフラットに住むこともある。家には洗濯機を備え、コンピュータを所有し使いこなすこともある。

それに比べ、ナタラージャ寺院の司祭の仕事のみに従事する後者の家族の財政は、非常に厳しい。プラサーダ²⁵⁾ (prasāda) の売店の閉鎖、年に一度まわってくる20日間の当番司祭の仕事 (vattam) が削減されていることで、新しい信者の獲得が困難になり、収入減を嘆く司祭も多い。中には既存の檀家からの収入の他、寺院から受け取った金額が、夜警備のために寺院で就寝した際のお金である月700ルピー (約1,500円) ほどであったと語る司祭もいた。しかし、いくら財政状態が厳しくても彼らが通過儀礼や家庭祭礼を省略する

ことは決してない。結婚式や聖紐式などかなりまとまった金額（最低50万円ほど）を要する儀式などでは、兄弟姉妹で同じ時に両方の儀礼を行うなどの工夫をしている。それでも通りに面したティンナイの一部を店舗スペースとして貸し出したり、長屋型住居の一部を売却することもよくみられることである（写真11）。ゴパール家においてもチャンドランの結婚式は妻レー



写真11 ティンナイの店舗

ヴァティ（re）の弟の聖紐式と同じ日に行われ、レーヴァティの実家ではその費用を捻出するために東サンナディに位置する長屋型住居の前半分を売却していた。北門の北西には、後者のような経済状態の厳しい司祭家族たちが集住する路地がある。これに対して裕福層の戸建てやフラットの住宅が認められた。居住空間の二極化が進んでいる。

居住空間における浄・不浄に目を向けてみると、空間的な制約の厳しいフラットの部屋に居住している家族では、月経中の女性は寝室に隔離され、他の家族のメンバーがそこへ立ち居らないように、女性がトイレに行くためにホールを横切る際には、なるべく距離を保ち、接触を避けるように注意しながら行動するという。部屋の一部をカーテンなどの閾を用いて区切る例もみられる。

4-2 チャンドランの新居

ゴパール家では2009年10月21日にゴパールの末の弟クマールの初夜の儀礼が行われ、妻ミーナクシを家に迎え入れることとなったため、トイレ／浴室の裏にあった庭を敷地としてあと数年で嫁を迎え込めるチャンドランの新しい家を建てた（図10）。図7の家と新居を比較してみると、玄関とホールの間にはティンナイが設けられていること、玄関から裏口までドアが一行に並んでいること、月経の不浄のための空間（寝室2）が南西に設けられていることが共通する。居住空間内にトイレがあること、あと数年で初夜の儀礼を迎えるチャンドランのための部屋には、

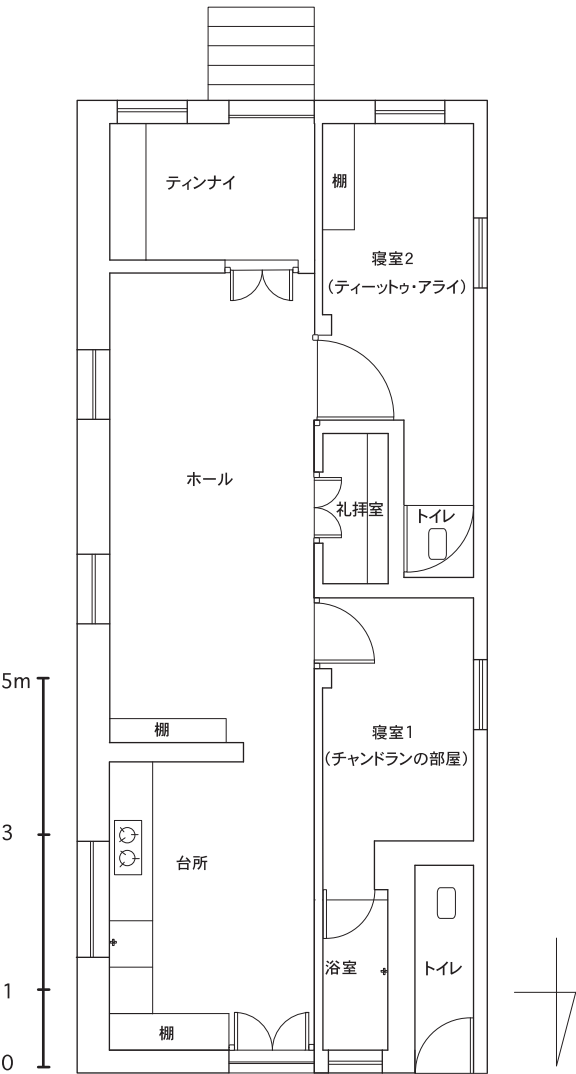


図10 チャンドランの新居平面図

内側に浴室が設けられていることが異なる。寝室という名はついているが、ゴパール、パールヴァティ、ガーイトリ、アンビガはみなホールで眠り、チャンドランは相変わらず夜10時を過ぎると北サンナディにある母の実家へ行き、そこで就寝する。寝室2にトイレが付属しているのは、月経の不浄を隔離するための動線を新しく作る空間的な余裕がないため、部屋の中で行動が完結し、他の空間に不浄が及ばないようにするためである。寝室1に浴室が付属しているのは、性交の後の不浄とされる身体を洗い流すためである。性交をすると必ず水浴びを行った後、女性は洗髪した後でなければ寺院に入ることができない。近い将来、若い夫婦が他の部屋を通らず、他の家族の目に触れず水浴びができるようにとの配慮でこの浴室は設置された。

このように、近代化の影響で財政的、空間的制約を受け、家屋自体が変容しても、浄・不浄の境界を明確に区別しようとする実践が行われていることがわかる。

5 おわりに

本稿の目的は、これまで表象として固定的に捉えられていた浄・不浄の観念が居住空間の中でいかに配慮され、実践されているのか、またそれが近代化の影響によっていかに変化しているのかを考察することであった。そこで、ディークシタルを取り巻く環境で形成されるコンタクト・ゾーンとして、ディークシタルと非ディークシタルという観点から考えると、まず、ディークシタルと非ディークシタルである外来者の間で考慮されるのは、下位カーストがもたらす不浄である。伝統的習慣やライフスタイルを維持するディークシタルに比べて、日常的に神事に携わることもない下位カーストの人々は宗教的浄性にそれほど敏感ではない。さらに、「浄性の高いものは接触において不浄に対して常に脆弱である」[Srinivas 1952]。そのため、ディークシタルは下位カーストのけがれが自らにうつらないよう行動する傾向にある。不浄を伴う外来者の侵入により空間的に浄性が汚され、それが自らの神事を汚すことにつながることは宗教的に最も忌避すべきことであり、ディークシタルと外来者を区別するような居住区内の動線や境界にも浄・不浄の区別として明確に表れている。家屋内部への侵入について外来者も暗黙のうちにその境界に従って行動していた。さらに、本稿では近代化が進む中、伝統と近代の狭間でディークシタルが自身の政治的、経済的苦境に対処しながら、いかにヒンドゥー文化の継承者としての伝統、宗教的浄性を維持しているのかを示してきた。居住空間内部では、長屋型の住宅のように動線が明確に分離できるような間取りを有する家は減少傾向にあるといえるが、それでも神に触れる司祭を汚さないよう、間取りや閾の工夫により不浄の忌避にはとりわけ注意が払われていた。それはディークシタルの日常生活における浄・不浄の観念の実践への意識の高さを示している。

居住空間は、物質文化の変化が顕著に表れる場所であり、家の構造、人の動きを通して人間関係や宗教観念が体现され、再生産される場所である。当該社会において最高位カーストを自他ともに認めるディークシタルは、対人関係および、空間的接触の場で浄・不浄の明確な区分を日常的に実践することにより、司祭集団としての他カーストとの差異化を

居住空間において身体化している。近代学校教育の浸透などの現代の社会変化が、ディークシタルのような上位カーストの人々にいかなる影響を与えているのか、今後は、居住空間の内側で形成される夫婦や親子を含む親密な人間関係にも目を向け、近代化と伝統の間でゆらぐ彼らのアイデンティティについても考察していく必要がある。

追記

本稿は2008年に福井大学工学研究科建築建設学専攻に提出した修士論文『チダンバラムにおけるディークシタル・コミュニティとその居住空間に関する研究』をもとに、加筆、修正を加えたものである。福井大学工学研究科、及び留学先のアンナマライ大学の教職員の方々、京都大学進学前より多々アドバイスを下さった田中雅一先生、そして何よりヒンドゥー文化に対する知識をほとんど持ち合わせずに飛び込んだ私を快く受け入れ、親身に接してくれたディークシタル家族とナタラージャ寺院の関係者にこの場をかりて深く感謝したい。

注

- 1) 本稿の内容は、2007年2月から2008年1月の現地滞在期、および2009年9月から10月にかけて、タミル・ナードゥ州チダンバラムを中心に行った現地調査に基づいている。なお、タミル語のローマ字表記はマドラス大学の *Tamil Lexicon* に依拠する。
- 2) 一般的にバラモンの中でも寺院司祭の地位は低いとみなされているが、ディークシタルは例外である。この点については後述する。
- 3) チダンバラムのディークシタルの家庭ではそこまで外国人の立ち入りを拒絶する例はあまりなかったが、写真撮影に際しては難色を示すことが多かった。彼らの居住空間、儀礼に関する調査、写真撮影の多くは、日々の参詣と訪問によって築いた信頼関係により可能となったものである。
- 4) ナタラージャ寺院の組織、管理については田中[1993]に詳しい。
- 5) 他の寺院が中世に成立したアーガマ (*Āgama*) に則って礼拝を行っているのに対し、ナタラージャ寺院ではアーガマよりはるかに古く、インド最古の聖典ともいわれるヴェーダ (*Veda*) に則って宗教儀礼が行われる。
- 6) 通常司祭は各家庭の通過儀礼に呼ばれ、命名式、聖紐式、結婚式などで特定のマントラを唱えることがあるが、ディークシタルの司祭たちはそういった人間の活動に関わる儀式を執り行うことはない。彼ら自身の通過儀礼は、同じバラモンでも異なるサブ・カースト (ソーリヤー・ブラーマン) の専属家庭司祭が行う。
- 7) サンガム (*Caṅkam*) とはタミル地方最古の文学。アーリア文化が南インドに深く浸透する以前、主に1世紀から3世紀にかけてつくられた抒情詩を集大成したもので、古代タミル人の生活様式、人生観、美意識を知る貴重な資料であるといわれている。
- 8) ヒンドゥー寺院では神々が配偶神とともに夫婦で祀られることが多い。タミル・ナードゥ州では妻の女神ミーナクシー (*Meenakshi*) が夫のスンダレーシュワラ (*Sundareshwarar*) よりも有名な寺院があるマドゥライという町の名前を「娼天下」を意味する代名詞として用いる。これに対して、夫であるシヴァのナタラージャで有名なチダンバラムを「亭主閑白」の代名詞として用いることがよくある。
- 9) 古代の建築書ヴァーストゥ・シャーストラ (*Vāstu Śāstra*) によって、寺院本殿を中心に同心円状に街路と建物が配置され、社会的な階層構造が、囲帯構造に結びつけられて住み分けがされる。中心の寺院付近を高位カーストの居住区が占める。
- 10) 寺院境内から大通りにいたる参道を指す。

- 11) ジェルは、ブランコを漕ぐという行為は、身体の平衡感覚を失わせ、目眩とある種のトランス状態を引き起こすことにより、神と人間を超自然的に同一化させることを指摘している [Gell 1980]。
- 12) ミソハギ科の低木で、和名を指甲花（シコウカ）という（学名 *Lawsonia inermis*）。その葉をペースト状にしたものは、儀礼時に手足の先を赤く染め、吉祥文様を描くマルダーニ（marutāṇi）のための染料として用いられる。
- 13) 建築、美術などの造形美術についての基本理念を記した経典。
- 14) 一般的にトゥルシーへの信仰はヴィシュヌ派で盛んである。ディークシタルはシヴァ派の司祭であるが、彼らの中にもヴィシュヌ神やラクシュミー女神を家族神とする家もある。特に伝統的な間取りを持つ家庭には備え付けの鉢がよく見られる。
- 15) 正方形のグリッドの分割パターンそれぞれに神々が勧請され、布置されたマンダラのこと。例えば、北西にヴァーユ（風神）、南東にアグニ（火神）、南にヤマ（閻魔）、北東にイーサ（シヴァ神）など。
- 16) パンガリーとは兄弟、父方のオジとイトコまでが含まれる父系親族の男性。
- 17) タミル・ナードゥ州西部の商業都市。
- 18) タミル語でアンクレットを意味する。
- 19) 日本の高校3年生に相当する。
- 20) 箆筒、ロッカーなど衣類全般や装飾品等を入れる鍵付きの家具。
- 21) タミル語ではウッキラーナ・アライ（ukkirāna arai）。
- 22) 夫が存命する既婚女性は吉なる力を宿すとされ、様々な儀礼的役割を果たす。スマンガリー・プージャーとは彼女たちの吉なる力によって恙なく儀礼が遂行されることを願い、特に通過儀礼の数日前の吉日に行われる。儀礼の中でスマンガリーの女性は儀礼主から贈呈されたサリーを着替えるプロセスがある。
- 23) 内堀 [2006] 参照。
- 24) ホールに置かれている飲み水用の 30L のボトルを交換するためにやってくる。
- 25) 神への供物のおさがり。この売店で売られているのはスナックや甘い菓子などが中心である。

参考文献

- 内堀基光 2006 「社会空間としてのロングハウス——イバンの居住空間とその変化」西井涼子・田辺繁治編『社会空間の人類学』世界思想社, pp. 92-115。
- 関根康正 1986 「タミル社会のケガレ観念の諸相」『民族学研究』51 (3): 219-247。
- 1992 「住居のコスモロジーとイデオロギーに関する動態的研究——南インドと日本を事例として」『住宅総合研究財団研究年報』19: 89-103。
- 1994 「清めと儀礼——タミルの成女式」辛島昇編『インド入門Ⅱ ドラヴィダの世界』東京大学出版会, pp. 111-123。
- 1998 「シンハラの人とタミル人の家」杉本良男編『暮らしがわかるアジア読本 スリランカ』河出書房新社, pp. 96-107。
- 田中雅一 1993 「南インドの寺院組織と司祭たち」長野泰彦・井狩彌介編『インド＝複合文化の構造』法蔵館, pp. 111-160。
- 1997 「カースト社会に生きる」栗原彬編『講座 差別の社会学 第三巻 現代世界の差別構造』弘文堂, pp. 329-345。
- 1998 「女から女神へ——南アジアにおける神格化をめぐる」『女神——聖と性の人類学』平凡社, pp. 91-120。
- 2002 『供儀世界の変貌——南アジアの歴史人類学』法蔵館。
- 2007a 「ヒンドゥー教」田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』世界思想社, pp. 76-91。
- 2007b 「神々への供物——南インド・チダンバラムにおける寺院儀礼と家庭祭祀をめぐる

- て」『人文學報』95:1-39。
- 2007c 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』1:31-43。
- 田辺繁治 2002 「再帰の人類学における実践の概念——ブルデューのハビトゥスをめぐり、その彼方へ」国立民族学博物館研究報告26(4):533-573。
- デュモン, ルイ 2001 『ホモ・ヒエラルキクス——カースト体系とその意味』(田中雅一・渡辺公三訳) みすず書房。
- 布野修司 2006 『曼荼羅都市——ヒンドゥー都市の空間理念とその変容』京都大学学術出版会。
- 編 2005 『世界住居誌』昭和堂。
- プラジャパティ, R. K.・谷内麻里子・塩谷壽翁 2008a 「ネワール族の住まいにおける人びとの行動と空間認識から見いだされる空間概念——ネパール・カトマンドゥ盆地のコカナとブンガマティの場合」『日本建築学会計画系論文集』73(627):939-946。
- 2008b 「ネワール族の儀礼および祝祭行事における人びとの行動と空間認識から見いだされる住まいをつくりだす空間概念——ネパール・カトマンドゥ盆地のコカナとブンガマティの場合」『日本建築学会計画系論文集』73(631):1861-1868。
- ブルデュ, ピエール 1990 『実践感覚2』(今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆訳) みすず書房。
- マジュプリア, トリロク C. 1989 『ネパール・インドの聖なる植物』(西岡直樹訳) 八坂書房。
- 三瓶清朝 1975 「浄と不浄——インド文化の儀礼的汚れの信仰について」『民族学研究』40(3):205-226。
- 1991 「ネパールのブラーマンの家庭におけるけがれと社会構造」『民族学研究』55(4):383-405。
- Beck, Blenda E. F. 1969 Colour and Heat in South Indian Ritual. *Man* (N. S.) 4(4):553-572.
- Dulau, Robert 1993 *The Town ... the House ... their Spirit*. Pondicherry: Institute Français de Pondichéry.
- Fuller, Christopher J. 2004 *The Camphor Flame: Popular Hinduism and Society in India*. Princeton: Princeton University Press.
- Gell, Alfred 1980 The Gods at Play: Vertigo and Possession in Muria Religion. *Man* (N. S.) 15(2):219-248.
- 1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford: Clarendon.
- Harper, Edward B. 1964 Ritual Pollution as an Integrator of Caste and Religion. *Journal of Asian Studies* 23:151-197.
- Hart, George L. 1973 Women and the Sacred in Ancient Tamilnad. *The Journal of Asian Studies* 32(2):233-250.
- Malik, Rajiv 2009 A Priestly Clan Under Siege. *Hinduism Today* October / November / December 2009, pp. 26-33.
- Marriott, MacKim 1955 Little Communities in an Indigenous Civilization. *Village India: Studies in the Little Community*. Chicago: The University of Chicago Press, pp. 171-222.
- Parry, Jonathan 1980 Ghost, Greed and Sin: Occupational Identity of the Benares Funeral Priests. *Man* (N. S.) 15(1):88-111.
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation*. London: Routledge.
- Srinivas, M. N. 1952 *Religion and Society among the Coorgs of South India*. London: Oxford University Press.
- Nanda, Vivek with George Michell ed. 2004 *Chidambaram: Home of Nataraja*. Mumbai: Marg Publications.